

使徒の働き10章23-48節 「異邦人も受ける聖霊のバプテスマ」

### 1A 異邦人の家に入るペテロ 23-33

1B ひれ伏すコルネリウス 23-26

2B 汚れていない者 27-29

3B 神のことばを待つ一家 30-33

### 2A 平和の福音 34-43

1B すべての主 34-35

2B ナザレのイエス 36-41

3B 罪の赦し 42-43

### 3A みことばを聞いてのバプテスマ 44-48

1B 聖霊のバプテスマ 44-46

2B 水のバプテスマ 47-48

## 本文

使徒の働き 10 章を開いてください。私たちの学びは、後半、23 節からです。私たちは前回、カイサリアにいるコルネリウスに、ヤッファにいるペテロを招きなさいと御使いが命じたところを見ました。そしてペテロは、幻で、天から、動物が入ったふろしきが降りてくるのを見ました。その時に、コルネリウスから遣わされた人々が、彼のいる、皮なめしのシモンの家に来ました。それで、彼らを泊まらせました。そして、その続きです。

### 1A 異邦人の家に入るペテロ 23-33

1B ひれ伏すコルネリウス 23-26

<sup>23</sup> それでペテロは、彼らを迎え入れて泊まらせた。翌日、ペテロは立って、彼らと一緒に出かけた。ヤッファの兄弟たちも数人同行した。

ペテロは、これらの人々が来た時に、御霊によって示されていました。ですから、天からの幻と、御霊による示しによって、「彼らが異邦人だけれども、受け入れなければいけない」ということを示されていたのです。四つ足の動物、地を這うもの、空の鳥などは、不浄の動物として食べてはいけないものだけれども、主が、「神がきよめた物を、あなたがきよくないと言ってはならない。(10:15)」と言われていたのです。これら汚れた動物は、実は、ユダヤ人たちが交わってはならないとする異邦人であることに、ペテロは気づいたのです。

そして、これからローマの百人隊長コルネリウスの家に行きます。彼の家の中に入らなければいけないことは、十分に考えられます。そこで、ペテロは、自分独りではなく、「ヤッファの兄弟たちも

数人同行した」と言っています。他に、起こったことの証言をしてくれる人たちが必要だったからです。二人、三人の証言があって、初めて事実と認められるという律法があります。

<sup>24</sup> そして次の日、ペテロはカイサリアに着いた。コルネリウスは、親族や親しい友人たちを呼び集めて、彼らを待っていた。

コルネリウスの一家は、神を信じ、敬っていましたが、自分たちだけでなく親族も、また親しい友人たちも呼び集めています。ここに、大きな期待感があることが伺えます。神からの使者が、神の使信を自分たちに語ってくれるという期待です。

<sup>25</sup> ペテロが着くと、コルネリウスは迎えに出て、足もとにひれ伏して拝んだ。<sup>26</sup> するとペテロは彼を起こして、「お立ちください。私も同じ人間です」と言った。

コルネリウスは、非常にペテロを敬って、足もとにひれ伏して拝んでしまいました。非常に尊ぶことはよいですが、伏し拝むことはしてはいけません。彼はイスラエルを、神を敬う人ですが、それでも違法人です。神から来た人であっても、礼拝するのは神のみです。天使の輝くさまを見て、天において、使徒ヨハネが天使を礼拝してしまうようになります。「黙 19:10 私は御使いの足もとにひれ伏して、礼拝しようとした。すると、御使いは私に言った。「いけません。私はあなたや、イエスの証しを堅く保っている、あなたの兄弟たちと同じしもべです。神を礼拝しなさい。イエスの証しは預言の霊なのです。」」

主に用いられると、人はどうしても、主ご自身ではなく、器そのものに注目します。主は目に見えませんが、器は見えるからです。しかし、器にしか過ぎないのです。ところが、まるで、自分の功績であるかのように、神の栄光を自分のものにしてしまう誘惑が来ます。人々が、そのようにあがめてしまうからです。それをペテロは、きっぱりと拒みました。

## 2B 汚れていない者 27-29

<sup>27</sup> そして、コルネリウスとことばを交わしながら家に入り、多くの人が集まっているのを見て、<sup>28</sup> その人たちにこう言った。「ご存じのとおり、ユダヤ人には、外国人と交わったり、外国人を訪問したりすることは許されていません。ところが、神は私に、どんな人のことも、きよくない者であるとか汚れた者であるとか言うてはならないことを、示してくださいました。

ペテロは、先に異邦人の遣わされた者たちを中に迎え入れましたが、ここではついに、自分自身が異邦人の家の中に入りました。ユダヤ人にとっては、自分の家に迎え入れるよりも、もっとやっではいけないことです。面白いのは、その大きな一步を、ことばを交わしていながら行ったことです。言い換えれば、もしことばを交わしていなかったら、意識して敷居をまたぐことはできなかったかも

しれません。そして、大ぜいの人たちがいます。彼らはみな、異邦人です！

そこで、ペテロが主から教えられたのは、これです。「ところが、神は私に、どんな人のことも、きよくない者であるとか汚れた者であるとか言うてはならないことを、示してくださいました。」ユダヤ人は、異邦人の家には訪問することさえありませんでした。覚えていますか、ガラテヤ書において、パウロが、ペテロたちが異邦人との食事の席で、エルサレムから割礼派の者たちがやってきた時に、いつの間にかその席を外していましたね。訪問もそうですが、食事に至っては論外です。食べれば、その相手と一つになるという意味合いが出てきます。

なぜ、そんなことまでになってしまったのでしょうか？レビ記 11 章にある食物規定の目的に、「11:44 あなたがたは自分の身を聖別して、聖なる者とならなければならない。」とあり、イスラエル人がこの規定を守ることによって、神に別れた聖なる民なのだということを知らせました。また、イスラエルの民が異邦人と結婚することも禁じられていました。「申 7:3 また、彼らと姻戚関係に入ってはならない。あなたの娘をその息子に嫁がせたり、その娘をあなたの息子の妻としたりしてはならない。」偶像を家に取り入れて、偶像礼拝をすることのないように、結婚することも戒められていました。

これらは、イスラエル人が、自分たちが神の所有の民であり、異邦人の神々を拝まないようにするため、また、忌まわしい行いに関わらないようにするために、聖さを保つためです。けれども、それは付き合わないことを意味しません。ところが、人は、枠組みを決めてしまったほうが、主にいつも尋ね求めて、それで決めるより楽です。それで付き合わないようになってしまったのです。イスラエルは、神の証人であるはずで、また、諸国の民にとって光であるはずですから、諸国の民の前で、神の栄光を現わします。であるならば、時には接触を積極的にしていかなければなりません。しかし、自分たちだけで過ごすようになりました。

そして、「ユダヤ人に生まれてさえすれば、そのまま天の御国に行く。」と思うようになります。ユダヤ人は自動的に御国に入ると思いました。そのことに、バプテスマのヨハネが、厳しい言葉を残します。「ルカ 3:8-9 それなら、悔い改めにふさわしい実を結びなさい。『われわれの父はアブラハムだ』という考えを起こしてはいけません。言うておきますが、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子らを起こすことができるのです。斧もすでに木の根元に置かれています。だから、良い実を結ばない木はすべて切り倒されて、火に投げ込まれます。」

ですから、救われるためには、まずユダヤ人であることが必要で、それでユダヤ教徒への改宗を行うのです。割礼を受けて、モーセの律法を守ります。晴れて改宗者になって、それでイエスを信じているならば、救われるというように思っていたのです。それまでは、救われるというのは、あくまでもユダヤ人の間だけのことであり、ユダヤ人信者たちも、異邦人は改宗して、それからイエ

スを信じて救われる、というように信じていたのです。

<sup>29</sup> それで、お招きを受けたとき、ためらうことなく来たのです。そこでお尋ねしますが、あなたがたは、どういうわけで私をお招きになったのですか。」

遣わされた者たちから聞いていましたが、その真意がまだ理解できていなかったようでした。ただ、御霊に従順になって来たのであり、何をしなければいけないのか分からなかったのです。

### 3B 神のことばを待つ一家 30-33

<sup>30</sup> すると、コルネリウスが言った。「四日前のこの時刻に、私在家で午後三時の祈りをしていますと、なんと、輝いた衣を着た人が私の前に立って、<sup>31</sup> こう言いました。『コルネリウス。あなたの祈りは聞き入れられ、あなたの施しは神の前に覚えられています。<sup>32</sup> だから、ヤツファに人を送って、ペテロと呼ばれるシモンを招きなさい。この人は海辺にある、皮なめし職人のシモンの家に泊まっています。』<sup>33</sup> それで、私はすぐあなたのもとに人を送ったのです。ようこそおいでくださいました。今、私たちはみな、主があなたにお命じになったすべてのことを伺おうとして、神の御前に出ています。」

すばらしいですね、百人隊長らしい、権威ある者からの命令、指令を待つ姿です。

## 2A 平和の福音 34-43

### 1B すべての主 34-35

<sup>34</sup> そこで、ペテロは口を開いてこう言った。「これで私は、はっきり分かりました。神はえこひいきをする方ではなく、<sup>35</sup> どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます。

ペテロは、ここで、イエス・キリストの福音をここで異邦人である彼らにも、語らなければいけないことを悟ったのです。まず、「神はえこひいきをする方ではないということです。「申 10:17-18 あなたがたの神、【主】は神の神、主の主、偉大で力があり、恐ろしい神。えこひいきをせず、…」

ユダヤ人が選ばれて、他の諸国の民から聖め別たれたことを先に話しましたが、その大前提として、その大前提として、人が神に言われることに聞いている、神の声を聞いて、それを信じ受け入れて、従っている。こういった生きた関係があるということにある、聖さであります。そこには、差別がありません。みことばを聞いて、心で信じるということには、差別はないです。主がダビデを選ばれた時、サムエルに語られたのは、「I サム 16:7 人はうわべを見るが、主は心を見る」でした。

割礼をさせなさいと命じられた主ご自身が、肉の割礼はあくまでも、心が清められることを表す印にしか過ぎないことを教えておられます。「申 10:16 あなたがたは心の包皮に割礼を施しなさい

い。もう、うなじを固くする者であってはならない。」男性の性器の一部である肉の包皮ではなく、心の包皮の割礼を施しなさいと命じておられるのです。

ですから、この原則は、ユダヤ人だけでなく、異邦人にも当てはまります。「**どこの国の人であっても、神を恐れ、正義を行う人は、神に受け入れられます**」と言っていますが、パウロも同じことを語りました。「**ロマ 2:9-11 悪を行うすべての者の上には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、苦難と苦悩が下り、10 善を行うすべての者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、栄光と誉れと平和が与えられます。11 神にはえこひいきがないからです。**」

## 2B ナザレのイエス 36-41

<sup>36</sup> 神は、イスラエルの子らにみことばを送り、イエス・キリストによって平和の福音を宣べ伝えられました。このイエス・キリストはすべての人の主です。

神は、順番として、イスラエルの子らにみことばを送られました。彼らは今も、選びの民であり、その召命は変わりません。しかし、そこに異邦人が、キリストにあって加えられたのです。平和の福音とペテロがここで呼んでいるのは、ユダヤ人と異邦人の両者が一致できるからです。そして、ペテロは、「**すべての人の主です**」と言っています。ユダヤ人の神がいて、異邦人の神がいたら、二人の神になってしまいます。けれども、一人の神なのです。ユダヤ人にとっての神は、異邦人にとっての神でもあるのです。

<sup>37</sup> あなたがたは、ヨハネが宣べ伝えたバプテスマの後、ガリラヤから始まって、ユダヤ全土に起こった事柄をご存じです。

「ご存じです」と言っているのは、ユダヤ人の間で大きく広がった動きについて、カイサリアに駐屯している、ローマの百人隊長であれば、知っているはずでしょう、と言っています。また、神を敬っているコルネリウスであれば、知っていると見たのです。

<sup>38</sup> それは、ナザレのイエスのことです。神はこのイエスに聖霊と力によって油を注がれました。イエスは巡り歩いて良いわざを行い、悪魔に虐げられている人たちをみな癒やされました。それは神がイエスとともにおられたからです。

ヨルダン川でのバプテスマにおいて、聖霊がイエス様に下られて、それ以来、聖霊に満たされて力ある働きを行われました。

<sup>39</sup> 私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムで行われた、すべてのことの証人です。人々はこのイエスを木にかけて殺しましたが、<sup>40</sup> 神はこの方を三日目によみがえらせ、現れさせてください

ました。

イエス様はガリラヤから、ユダヤ地方、それからエルサレムへと向かわれました。ペテロは、その時の証人なのだと言っています。そして十字架に付けられ、三日目に神がよみがえらせてくださったことも目撃しています。

<sup>41</sup> 民全体にはではなく、神によって前もって選ばれた証人である私たちに現れたのです。私たちは、イエスが死者の中からよみがえられた後、一緒に食べたり飲んだりしました。

そうです、イエスの復活は、限られた人たちだけが目撃しました。神に選ばれた人たちのみが、その復活を見て、証人となりました。たとえ見たとしても、信じないでしょう。ラザロの復活を見たのに、信じなかった人々もいます。そして、その復活は、肉体をとまなう復活であり、幽霊でもなんでもないことを示すために、イエスは一緒に食べたり、飲んだりしました。

### 3B 罪の赦し 42-43

<sup>42</sup> そしてイエスは、ご自分が、生きている者と死んだ者のさばき主として神が定めた方であることを、人々に宣べ伝え、証しするように、私たちに命じられました。<sup>43</sup> 預言者たちもみなイエスについて、この方を信じる者はだれでも、その名によって罪の赦しを受けられると、証しています。」

ペテロも他の使徒も明確に、主イエスがよみがえられ、神の右の座に着かれ、それから人々を裁かれるために戻って来られることを教えています。神が裁かれるから、悔い改めて、罪の赦しを得なさいという使信なのです。

ここまで、ペテロの説教を聞いて、これまでのユダヤ人に対する福音宣教と、内容が変わらないことに気づかれたでしょうか？もっと、平易に語っている面はあります。けれども、内容は変わりません。私たちも、自分が仏教徒だから、イエス・キリストの福音は遠くに感じる、これは自分のためではないと思うかもしれません。いいえ、そうではないのです。神は近くにおられます。

### 3A みことばを聞いてのバプテスマ 44-48

#### 1B 聖霊のバプテスマ 44-46

<sup>44</sup> ペテロがなおもこれらのことを話し続けていると、みことばを聞いていたすべての人々に、聖霊が下った。<sup>45</sup> 割礼を受けている信者で、ペテロと一緒に来た人たちは、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたことに驚いた。

ここに純粋な形での、御霊の注ぎがあります。何か行いをしたから聖霊が下ったのではなく、信じたから下ったのです。信仰をもって御言葉を聞く中で、御霊が働いてくださいます。「ガラ 3:2b あ

なたがたが御霊を受けたのは、律法を行ったからですか。それとも信仰をもって聞いたからですか。」もちろん、信仰を持って聞いたからです。

主はすべての人に対する、御霊の注ぎをご計画されていました。老人も青年も、男も女も、すべての人に御霊を注ぐというのが、ヨエルの預言で、それが五旬節で実現しました。モーセなど、旧約の時代は、選ばれた人々に注がれた御霊ですが、信じる者すべてに注がれたのです。けれども、ユダヤ人たちは、それはあくまでもユダヤ人の間だけだと思っていたのです。それで今、割礼を受けている信者が、異邦人にも聖霊の賜物が注がれたことに驚いています。

このようにペテロは、「神の恵みによる聖霊のバプテスマ」を、コルネリウスたちの回心から知ったのです。コルネリウスとその家族は、割礼はもちろん受けていません。イスラエルの神は敬っていましたが、律法を守り行っていません。けれども、ペテロが語った福音のことば、イエスが、十字架にかけられ、三日目によみがえられたことを語ったのです。それを聞いている時に、彼らの上に聖霊の賜物が注がれたのです。

私たちはどこかで、心に条件をつけています。これこれをすれば、聖霊が注がれるはずだと。また、このようにならなければ、聖霊のバプテスマにあずかれないと。いいえ、ただみことばを聞いて、信じている中で、与えられる御霊なのです。

<sup>46</sup> 彼らが異言を語り、神を賛美するのを聞いたからである。するとペテロは言った。

聖霊が下られた時に、異言であるとか、何らかの目に見えるしるしが伴っています。これまで、サマリア人の姿、そして後にエペソの信者の姿を見ますが、異言を語ったり、預言を語ったりしています。異言が必ず伴うという人々がいますが、私は必ずしも異言だとは限らないと思います。異言を皆が語るわけではないと、コリント第一 14 章でパウロが教えているからです。ペテロとしては、外国の言葉で、神を賛美しているのは、まさに五旬節の出来事だと思い起こしていたことでしょう。

## 2B 水のバプテスマ 47-48

<sup>47</sup>「この人たちが水でバプテスマを受けるのを、だれが妨げることができるでしょうか。私たちと同じように聖霊を受けたのですから。」<sup>48</sup> ペテロはコルネリウスたちに命じて、イエス・キリストの名によってバプテスマを受けさせた。それから、彼らはペテロに願って、何日か滞在してもらった。

ペテロは、五旬節の時に、水のバプテスマを授けて、彼らが悔い改めによって、罪が赦され、それから聖霊の賜物が与えられることを話しました。ここではその反対です。水のバプテスマを受ける前に彼らは、信仰によって御言葉を聞いていたのでその場で聖霊のバプテスマを受けたのです。それで、水のバプテスマを受けない理由はないとしたのです。水のバプテスマの条件は、ただ悔

い改めて、信じるだけです。他にありません。

そしてコルネリウス一家が、何日かいてほしいと願って、滞在して、それからエルサレムに行きます。フォローアップが必要だったことでしょう。

いかがでしょうか？主が、天の御国の鍵を持っているペテロに対して、神のご計画が、異邦人にまで及んでいることを目撃したのです。それに必要だったのは、御霊に対するペテロの従順でした。彼は、自分の心にある壁を克服しないといけませんでしたが、天の啓示に従順になり、御霊に従いました。そして、福音が全ての人に、差別なく与えられていることを知ったのです。

私たちは、どうでしょうか？どこかに抱いている心の壁は、キリストの平和によって打ち砕かれなければいけません。その恵みこそが、すべての人の間に差別をなくし、交わることができるようにするのです。